

東日本大震災からの復興を考える ～チーム北リアスの10年～

李 永 俊¹

1. 目 的

チーム北リアスは、本学地域創生本部ボランティアセンターをはじめ、大阪大学、京都大学、八戸高専、日本災害救援ボランティアネットワークなどの有志が立ち上げたボランティアネットワークで、震災発生から今日まで岩手県の北リアス地域の復興をお手伝いしている。東日本大震災発生から10年を迎える今、震災の発生から今日までを振り返り、震災の教訓を共有することで、災害復興支援について理解を深めるとともに、今後の災害支援活動のあり方を模索する。

2. プ ロ グ ラ ム

(1) フォーラム開催日時：2021年3月10日（水） 18：00～20：00

開催場所：ヒロロ4階 弘前市民文化交流館ホール

(2) プログラム

1) 開会の挨拶

- 弘前大学長 福田眞作
- 弘前市長 櫻田 宏
- 野田村長 小田祐士

2) 講演

- 「復興に向けた新たな活動に伴走する」 大阪大学大学院人間科学研究科 教授 渥美 公秀氏
- 「住民とボランティアが協同する地域見守り活動」 京都大学大学院人間・環境学研究科 教授 永田 素彦氏
- 「学生たちの地域復興ワークショップの意味」 八戸工業高等専門学校総合科学教育科 教授 河村 信治氏
- 「野田村での活動から得たもの」 NPO 法人日本災害教授ボランティアネットワーク（NVNAD） 常務理事 寺本 弘伸氏
- 「記憶を復興する」 大阪大学大学院人間科学研究科 助教 宮前 良平氏
- 「野田村の10年」 久慈市観光物産協会専務理事・チーム北リアス現地事務所長 貫牛 利一氏
- 「チーム・オール弘前」

弘前大学人文社会科学部教授・地域未来創生センター長・地域創生本部ボランティアセンター長 李 永俊

¹ 弘前大学人文社会科学部・教授

3) パネルディスカッション

パネリスト 上記講師と同様

モデレーター 弘前大学人文社会科学部教授・地域未来創生センター長・地域創生本部ボランティアセンター長 李 永俊

3. 第1部・招待者による講演の要約

復興に向けた新たな活動に伴走する

(大阪大学大学院人間科学研究科・教授・渥美公秀氏)

これからどうしていくのかというときに防災が問題になるが、専門家主導で防災をやるのはよくないと思います。多様な人々が主役となって、誰もが助かる地域を作っていく必要があります。誰もが助かる地域を作るためには祭りを使うことが効果的なのではないかと考えています。2018年に野田村と大阪大学で協定を結びました。2019年に「10年後の野田村を他の村では真似できないユニークな村にする」ことを目標に「野田学」が本格開講し、講義、実習、演習形式で学びます。まだ村民の登場する場面が少なく、役場の職員が中心となっているため、村全体に浸透させることが課題です。

住民とボランティアが協同する地域見守り活動

(京都大学大学院人間・環境学研究科・教授・永田素彦氏)

チーム北リアスは、被災者に寄り添う、交流する、応援する、そして一緒に何かをすることを重視してきました。そのような方針のもと実施してきたのが地域見守り勉強会です。目的は仮設住宅での生活の質が少しでも充実することを目指した見守り活動を推進することです。野田村社協、地域包括支援センター、民生委員、チーム北リアスなどが参加し、2012年5月から2016年3月まで月1回程度開催しました。その間、参加者間の情報共有からはじまり、目の前の具体的な課題に協同で対処することを試み、最後のころは仮設住宅解消後の新しいコミュニティづくりを目指した活動をしました。仮設住宅は2017年にはすべて解消され、高台団地などでの新たな生活がスタートしています。これからも、外部ボランティアの強みを活かして、都会と田舎のたすきがけ、学生と村民の学びあいを通したコミュニティづくりに伴走していきたいと思っています。

学生たちの地域復興ワークショップの意味

(八戸工業高等専門学校総合科学教育科・教授・河村信治氏)

チーム北リアスの中で継続して実施してきたプロジェクトについて話していきます。2011年の夏前に、関係する研究室から野田村に学生を連れて行って出来ることはないかと提案がありました。学生のトレーニングをかねてシャレットワークショップを行っていたため、それを野田村で行うことを考えました。当時は震災から4,5ヶ月で活動は懸念されたが、模索しながら行いました。学生達も緊張感を持ちながらも次の年には準備をし、実施しました。そもそも学生に求められていることは、良い提案を出すことより、一緒に考えることです。野田村で、漁師さんと農業や漁業体験をしながら、野田村を知って、村民と親交を深めていきました。コロナで合宿は出来なくなったため、オンラインでゼミを展開しながら、村の課題としての漁業の後継者問題にアプローチしています。親しくなった漁師さんに協力してもらいながら、写真を順番に見ながら思いつくことを考えるグループワークを行いました。それで漁業に対するイメージは変わっていきました。こういうことをやって展開していくと、子どもや若者に何か提案が出来るのではないかと考えています。

野田村での活動から得たもの

(NPO 法人日本災害教授ボランティアネットワーク (NVNAD) 常務理事・寺本弘伸氏)

2011 年 3 月末にボランティア活動の第一弾として、大阪大学の学生と野田村を訪問しました。そこでは津波災害は初めての経験で、少しでも早く高台に避難することの必要さを学びました。野田保育所の方々は普段から高台に避難する訓練をしていて、スムーズに避難することが出来たそうです。普段からあることが大事だと言うことを学び、所属する NPO 法人では、「歩く」をテーマにいろいろなプログラムをやり始めました。もう一つ学んだことは相手の立場に寄り添った支援の大切さやつながりの大切さです。被災者の家を 1 軒 1 軒訪問したが、相手からしたら、見ず知らずの人で、「出来ることありますか」と声をかけても「大丈夫です」と言われました。そこでボランティアというのは相手の考えとか立場とか地域性とかを考えた上で支援するのが大事だと改めて感じました。弘前チーム・八戸チーム・西宮チームとつながりがあったおかげで切れ目のない活動に繋がったと感じました。

記憶を復興する

(大阪大学大学院人間科学研究科・助教・宮前良平氏)

チーム北リアス写真版の宮前です。野田村では家屋だけでなく、家の中にある家族写真も流されてしまいました。数えられる限りでは約 8 万枚流出しています。たくさんのボランティアのみなさんで約 8 万枚の写真の洗浄をしました。そして、洗った写真を野田の方々に見ていただき、自分の写真があれば持って行ってもらおう。この活動は写真家の浅田政志さんも参加しており、『浅田家!』という映画の中でも取り上げられました。その後、写真の返却が進んでいくと、持ち主の見つからない写真が残るようになりましたが、お茶会でおしゃべりをするのが持ち主を見つけるための鍵となりました。写真を見てもらうと、この人は〇〇さんとすぐにわかることも多いです。お茶会は写真を探し終わった後でも、思い出話をする場になりました。記憶の復興とは大きな物語ではなく、なにげなさや言葉にならない記憶であり、被災した方ひとりひとりの生きられた経験を想起していく必要があると感じています。

野田村の 10 年

(久慈市観光物産協会専務理事・チーム北リアス現地事務所長・貫牛利一氏)

野田村の人口は当時 4,600 人ほど、現在は 4,100 人ほどになりました。

震災の影響のみならず、昨今の人口減少問題も関係しています。

チーム北リアスの結成のきっかけは、ボランティアのネットワーク化を進めたいという思いからでした。

震災直後から、色々な大学の学生、教員の方々がボランティアで訪れていただいていた。

個別の支援活動よりは、「チームボランティア」としてのスタイルが、村民にとってわかりやすいという利点がありました。

そして災害復旧を進める中で、村民にとって「チームの力」が大変心強く感じ、感謝に耐えません。

2014 年春、桜の苗木を弘前の皆さんからいただき、皆で植樹を行い、今では花見が出来るようにもなりました。

また、8 月に行われる「野田祭り」の後押しをしていただいたのが「弘前のねぶた」でもありました。

様々に交流を続けながら、現在に至るわけですが、交流そのものの力が、これからの野田村にとっての財産となって行くことと思います。

ありがとうございます。

チーム・オール弘前

(弘前大学人文社会科学部教授・地域未来創生センター長・地域創生本部ボランティアセンター長・李永俊)

チーム・オール弘前はボランティアも被災者も、みんなの顔が見える関係づくりを大事にして活動して

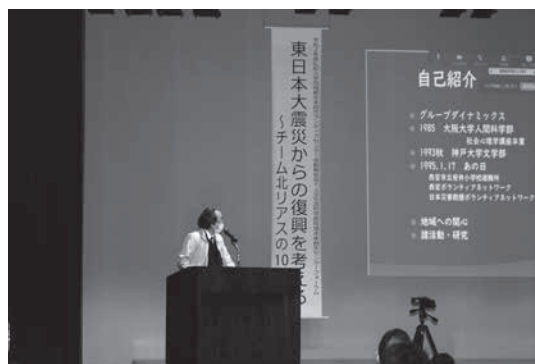
きました。東日本大震災の発災当時に、弘前大学ではボランティアセンターがなかったので、教員有志で活動をはじめました。最初のボランティアバスは、2011年4月12日でした。がれき撤去は手作業で行っていたため、学生らの怪我を心配していました。しかし、市民との協働で実施していたため、経験豊富な社会人の皆さんが見守ってくださり、一人もけが人を出さず無事に終わることが出来ました。2011年8月からは交流活動が始まりました。野田村の和佐羅比山（わさらびやま）で津軽三味線を演奏したり、弘前のねぶたを野田村の夏祭りで運行したりもしました。今は、次の世代に災害の教訓を継承するために、教育活動やフォーラム、市民講座の開催など様々な活動を続けています。また、野田村の協力を得て、野田村村民アンケート調査を実施し、多角的に復興を検証しています。また、チーム・オール弘前のネットワークが出来たことで、突発的な災害に対しても、すぐ動けるような体制づくりができました。熊本震災や北海道胆振東部地震のときもすぐに募金活動や現地へのボランティア派遣を行うことが出来ました。ボランティア活動では、自ら動く力が大切です。これからは、ボランティア意識の啓発やボランティアリーダーの育成事業にも力を入れたいと考えています。

4. パネルディスカッション

チーム北リアスは、緩やかなネットワークです。様々な大学が連携をし、活動しているというのは珍しいです。お互いを批判しないことをルールとして活動しています。ボランティアをする際、自分のやりたいことの押しつけではなく、現地の方がやりたいことを受け止めて一緒にやれることをやり、やり過ぎないことが重要でした。がれきの中から写真を拾い上げる活動ということには誰も経験していない活動で、マニュアルなどはありませんでした。なんとかしなきゃという思いで試行錯誤しながらプロの写真家からアドバイスをもらい活動しました。

今後の活動について、永田さんは、夏祭りをはじめとして、イベントをやりつつ、なるべく深い交流をしていきたいと述べました。活動を体験した学生から「自分たちの生活では味わえないような豊かさを感じる」というような感想に刺激を受けます。

教育的な観点から河村さんは、地方経済復興に何が出来るといったら、たいしたことは出来ないが、それに対して学生や世間の関心を向上する教育的なアプローチだと述べました。野田学の今後の方向性について、渥美さんは、1番の課題は、村民の村民による村民のためのという野田学にしていこうと述べました。村民と役場の考えにずれがあり、その乖離が当たり前になっているから、その乖離に気づいて何かできることをしたいと述べました。寺本さんは、交流を通して確実なつながりを広げていくと述べました。関西では野田村ファンクラブ、野田村の食材を使って料理対決なども行っています。現地事務所長の貫牛さんは、10年間で繋がりを持った人、作業に来てくれた人たちとの出会い、そして関係を続けることが大事だと述べました。自身も出会いとつながりで気持ちが豊かになり、財産になったとも。そして今度は野田村からの返礼のようなものをしたいとも述べられた。



令和2年度 弘前大学地域創生本部

ボランティアセンター活動報告会

人文社会科学部地域未来創生センターフォーラム

東日本大震災からの復興を考える

チーム北リアスの10年

参加
無料申込不要
当日参加可

令和3年

3月10日(水)

18:00~20:30

ヒロ口4階 弘前市民文化交流館ホール

(会場定員:75名)及びオンライン配信

事業目的

東日本大震災発生から10年を迎える今、震災の発生から今日までの10年間を振り返り、震災の教訓を共有することで、復興支援について理解を深めるとともに、地域創生本部ボランティアセンターが今年度実施した活動を弘前市民と共に振り返り、新しい年度に向けて事業の見直しを行うべく実施するものです。

主催／弘前大学地域創生本部
ボランティアセンター、
弘前大学人文社会科学部
地域未来創生センター

共催／弘前市

後援／野田村、野田村社会福祉協議会、
弘前市社会福祉協議会、
チーム北リアス、
株式会社東奥日報社、株式会社陸奥新報社

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場でのご参加の際は必ずマスクの着用をお願いします。また、当日体調の優れない方は、ご無理をされないようにお願いします。
※会場にマスクの用意はございません。各自、ご準備をお願いします。



zoom

[ミーティングID] 677 563 6879 [パスワード] 32683198

オンライン配信の視聴はこちらから▶



※本事業はほくとう総研地域活性化連携支援事業の助成を受けて実施するものです。

令和2年度弘前大学地域創生本部ボランティアセンター活動報告会

×

人文社会科学部地域未来創生センターフォーラム

「東日本大震災からの復興を考える ～チーム北リアスの10年～」

プログラム

18:00～18:10 開会の挨拶

司会：弘前大学人文社会科学部 教授 平野 潔

- 弘前大学長 福田 眞作
- 弘前市長 櫻田 宏
- 野田村長 小田 祐士

18:10～19:10 講演

- 「復興に向けた新たな活動に伴走する」
大阪大学大学院人間科学研究科 教授 渥美 公秀氏
- 「住民とボランティアが協同する地域見守り活動」
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授 永田 素彦氏
- 「学生たちの地域復興ワークショップの意味」
八戸工業高等専門学校総合科学教育科 教授 河村 信治氏
- 「野田村での活動から得たもの」
NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD) 常務理事 寺本 弘伸氏
- 「記憶を復興する」
大阪大学大学院人間科学研究科 助教 宮前 良平氏
- 「野田村の10年」
久慈市観光物産協会専務理事・チーム北リアス現地事務所長 貫牛 利一氏
- 「チーム・オール弘前」
弘前大学人文社会科学部教授・地域未来創生センター長・地域創生本部ボランティアセンター長
李 永俊

19:10～19:15 休憩

19:15～20:00 パネルディスカッション

パネリスト：上記講師と同様
モデレーター：弘前大学人文社会科学部教授・地域未来創生センター長・地域創生本部ボランティアセンター長 李 永俊

20:00～20:25 活動報告・意見交換・総括

- 弘前大学地域創生本部ボランティアセンター
報告者：ボランティアセンター学生事務局元代表 武藤 春香
ボランティアセンター長 李 永俊
- 全体意見交換
- 総括 ボランティアセンター長 李 永俊

20:25～20:30 閉会の挨拶

- 弘前大学人文社会科学部長 飯島 裕胤

V-1

東日本大震災からの復興を考える
～チーム北リアスの10年～



お問い合わせ

弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 TEL 0172-39-3198 (平日10:15～17:00)
E-mail irrc@hirosaki-u.ac.jp URL <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/irrc/>